

D-4 現代朝鮮語の逆条件を表す「副動詞 + とりたて」*

黒島規史 (東京外国語大学／日本学術振興会特別研究員)

norifumi.964ma@gmail.com

1 本発表の目的

現代朝鮮語では継起的な時間関係を表す副動詞に、とりたての =to 「も」を付すことで逆条件を表すことができる。韓国では =to を「特殊助詞」「補助詞」などと呼ぶが、ここでは便宜上、日本語の「モ」のように =to をとりたて詞と見ることにする。

- (1) tayhak=ul ka-ci anh-ko=to elma-tunci hwullyungha-n salam=i toy-l swu
大学=ACC 行く-NMLZ NEG-CVB.SEQ=も いくら-でも 立派だ-ADN 人=NOM なる-ADN.IRR すべ
iss-e.
ある-DECL.NPOL

「大学に行かなくても、いくらでも立派な人になれる」[2BEXXX20]¹

(1) では副動詞の -ko に =to が付き、「通常はその帰結を引き起こさない条件・状況が、その条件関係を成立させる」(前田 2009: 192) 逆条件を表している。

逆条件として用いられる -ko=to を中心に扱うが、同じく継起的な意味を表す副動詞に =to が付き逆条件を表しうる -kose=to と -(a/e)se=to も扱う。

本発表では、逆条件を表す「副動詞 + とりたて」の意味的、統語的特徴を明らかにし (§3)、逆条件を表す「副動詞 + とりたて」が条件を表す「副動詞 + 主題標識」と並行的な統語的特徴を見せること (§4)、副動詞の表す時間関係と条件の連続性により条件の意味が生じ、=to の表す極端の意味により逆条件になることを主張する (§5)。

2 「副動詞 + とりたて」に関する先行研究

先行研究では逆条件を表す最も代表的な形式である -(a/e)to や、=to が含まれていると分析される -telato や -(u)lcilato を扱った研究が多い (Lee 1977 等)。韓国では副動詞に =to や主題標識の =un/nun 等が付いた形式を「統合形」と呼び、-ko=to についてはその他の「統合形」と一緒に扱われることが多かった。-ko=to の意味機能を中心に扱った論考は Jin (2008) があるのみであるが、この論考では逆条件以外の意味も扱っており、-ko=to の逆条件についての考察は少ない。また、後述するように「副動詞 + とりたて」を扱う場合には条件を表す「副動詞 + 主題標識」との比較が重要であるが、両者の比較は言語教育のための文法記述に関する研究があるのみである。

先行研究では、とりたての =to が付くことによりなぜ逆接的意味が生じるのかについては説明しているが (Ham 2013 等)、そもそもなぜ条件の意味が出るのかについては説明していない。

* 本発表の内容は 2016 年 10 月 7 日に東京外国語大学で行われた非公開の予行演習でも発表し、有益なコメントをいただいた。参加者のみなさま、及び会を主催してくださった長屋尚典先生に感謝申し上げる。言うまでもなく本稿におけるいかなる誤りも筆者の責任である。なお、本研究は JSPS 科研費 JP16J07745 の助成を受けたものである。

¹ 用例は “21seyki seycongkyeyhoyk choycong sengkwamwul (21 世紀世宗計画最終成果物)” から引用する。1980 年以降に韓国で刊行された作品を対象に、ジャンルは小説、ドラマ脚本、映画シナリオ、戯曲に限定したうえで、歴史小説やソウル方言以外の方言が大量に混在する作品は除外した。コーパスの規模は全 311 作品、約 940 万語節である。[] の番号はそれぞれの作品のファイル番号である。特に注のない場合は作例である。また、ハングルは Yale 式ラテン文字転写して提示する。

したがって、逆条件を表す「副動詞 + とりたて」の意味を、条件を表す「副動詞 + 主題標識」との比較から考察し、「副動詞 + とりたて」がなぜ（逆）条件を表すのかを明らかにする必要がある。

3 逆条件を表す「副動詞 + とりたて」

-ko=to, -kose=to, -(a/e)se=to の中で、最も逆条件として用いられるのは -ko=to である。主に 3.1 で -ko=to を取り上げ、3.2, 3.3 で -kose=to, -(a/e)se=to を簡単に考察する。

3.1 -ko=to

-ko=to を含む文は「X しても（しなくても）Y できる」という意味を表すことが多い。逆条件を表すためには、主節に可能や疑問などのモダリティを含む必要があり、特に可能形で現れる頻度が多い (2)。過去形などになると、単に事実的用法を表すのみである (3)。また、すでに Jin (2008: 7) で指摘されているように、副動詞節と主節の主体は同一である。

- (2) na=nun ku iyaki=ka cengmal-i-nci ani-nci han#twu mati=man tut-ko=to kumpang
1=TOP その話=NOM 本当-COP-か NCOP-か 一#二 言=だけ 聞く-CVB.SEQ=も すぐ
al swu iss-ta.
知る:ADN.IRR すべ ある-DECL
「わたしはその話が本当かどうか一言二言聞いただけでもすぐにわかる」[3BES0003]

- (3) nay mal=ul tut-ko=to E=uy nwun=ey=nun phyoceng=i eps-ess-ta.
1:GEN 言葉=ACC 聞く-CVB.SEQ=も E=GEN 目=DAT=TOP 表情=NOM ない-PST-DECL
「わたしの言葉を聞いても E の目には表情がなかった」[BRE00307]

また、(1) のように副動詞節が否定の形で現れる場合も多い。

しかし -ko=to namta 「～ても十分だ (lit. ～ても余る)」は主節にモダリティ要素がなくとも逆条件を表せる。この場合、副動詞節と主節の主体も同一ではない。(4) のような例から意味変化し、「～ても十分だ」という意味が生じたと考えられる。つまり、(4) のような例では、「一生使う → 残らない」という前提があり、その主節が否定されるという関係になっている。次の (5) はもはや具体的な物が残るという意味が薄れている。

- (4) echaphi phyengsayng ssu-ko=to nam-ul caysan=i naykey=nun iss-ta.
どうせ 一生 使う-CVB.SEQ=も 残る-ADN.IRR 財産=NOM 1:DAT=TOP ある-DECL
「どうせ一生使っても残る財産がわたしにはある」[CE000019]
- (5) kuttay emeni=uy kosayng=i elmana simhay-ss-nunci=nun cimcak=i ka-ko=to
そのとき 母=GEN 苦労=NOM どれくらい ひどい-PST-か=TOP 見当=NOM 行く-CVB.SEQ=も
nam-nunta.
残る-DECL:NPST
「そのときの母の苦労がどれくらい大変なものだったかは十分に見当がつく」[3BES0003]

ちなみに -ko=to は逆条件を表す最も代表的な形式 -(a/e)to と比べると、副動詞が元々持つ継起の意味を残しており、従属節の出来事が完了した状態において主節の出来事が起こる場合に用いられる (6)。

- (6) nam=ul huysayng-sikhi-**ko=to** hayngpokha-l swu iss-ulkka=yo?
 他人=ACC 犠牲-CAUS-CVB.SEQ=も 幸せだ-ADN.IRR すべ ある-だろうか=POL
 「他人を犠牲にしても幸せになれるのでしょうか？」 [CE000072]

-ko=to は -(a/e)to と比べると、反復にしにくく (7)、また不定語と共起すると不自然である (8).

- (7) [mek-eto mek-eto / ?? mek-**ko=to** mek-**ko=to**] pay=ka kopu-ta.
 食べる-CVB.CONC 食べる-CVB.CONC 食べる-CVB.SEQ=も 食べる-CVB.SEQ=も 腹=NOM へる-DECL
 「食べても食べてもお腹が空いている」

- (8) mwues=ul [mek-eto / ?? mek-**ko=to**] sal=i an cci-nta.
 なに=ACC 食べる-CVB.CONC 食べる-CVB.SEQ=も 肉=NOM NEG つく-DECL:NPST
 「なにを食べても太らない」

3.2 -kose=to

-kose=to も -ko=to と似た意味を表し、やはり主節に可能や疑問などのモダリティを含む。また、副動詞節は専ら否定の形で現れる (9).

- (9) kule-n salam=tul=hako ssawu-ci anh-**kose=to** sa-l swu iss-nun kil=un
 そうだ-ADN 人=PL=COM 争う-NMLZ NEG-CVB.SEQ=も 生きる-ADN.IRR すべ ある-ADN.NPST 道-TOP
 iss-e=yo.
 ある-DECL.NPST=POL
 「そんな人たちと争わなくても生きられる道はありますよ」 [BRE00313]

3.3 -(a/e)se=to

-(a/e)se=to は主節の述語が antoyta (駄目だ) で現れることが一番多く (10)、そうでない例は -(a/e)se=to が「～したあとでも」のように時を表すような場合が見られた (11).

- (10) ilha-ci anh-nun ca=nun mek-**ese=to** an toynta-ko pwa.
 働く-NMLZ NEG-ADN.NPST 者=TOP 食べる-CVB.SEQ=も NEG なる:QUOT-CVB 見る:DECL.NPST.NPOL
 「働かない者は食べてもいけないと思う」 [3BES0011]
- (11) apeci=nun cwuk-**ese=to** kule-n saynghwal=ul kyeysok=ha-lkka?
 父=TOP 死ぬ-CVB.SEQ=も そうだ-ADN 生活=ACC 継続=する-だろうか
 「父は死んでもそんな生活が続けるのだろうか」 [2CE00001]

4 条件を表す「副動詞 + 主題標識」との関係

日本語の「テハ」も「～してはいけない」というときなど、「副動詞 + 主題標識」が条件を表すことがある。朝鮮語でも同じような現象が見られる。

すでに述べたように -ko=to, -kose=to は主節が可能形で現れることが多く、-ko=nun, -kose=nun (副動詞 + 主題標識) は逆に主節が不可能形で多く現れ、「副動詞 + 主題標識」の主節が否定されるという関係になっている (2), (12).

- (12) na=lul molu-**ko=nun** na=lul kuleh-key kiph-i ihayha-nun tacengha-n
 1=ACC 知らない-CVB.SEQ=TOP 1=ACC そうだ-ADVLZ 深い-ADVLZ 理解する-ADN.NPST やさしい-ADN
 kul=ul ssu-ci mos-hay-ss-ul ke=yo.
 文章=ACC 書く-NMLZ IMPS-する-PST-ADN.IRR こと=POL
 「わたしのことを知らなかったら、わたしをこんなに深く理解したやさしい文章は書けなかったで
 しょう」[CJ000245]

さらに、-(a/e)se=to も -(a/e)se=nun (副動詞 + 主題標識) も、どちらも主節の述語が antoyta 「駄目だ」であることが大部分であり、-(a/e)se=to はそもそも -(a/e)se=nun (副動詞 + 主題標識) を前提に副動詞節が表す事態をとりたてているのだと言える (10), (13).

- (13) siki=lul nohchy-**ese=nun** an tway.
 時期=ACC 逃す-CVB.SEQ=TOP NEG なる:DECL.NPST.NPOL
 「時期を逃してはならない」[2CE00004]

また、Haspelmath & König (1998) も指摘しているように、条件文の場合も従属節の事態や一部に焦点があれば、逆条件の意味が出る。次の (14) の例は「副動詞 + 主題標識」が条件を表している例だが、=man 「だけ」により従属節の一部（ここでは mal 「言葉」）が焦点になり、単に条件と解釈することもできるし、逆条件と解釈することもできるようになる。

- (14) tekwuntana tangsin mal=*man* tut-**kose=nun** ku il=i sasil-i-nci hwakinha-l
 その上 あなた 言葉=だけ 聞く-CVB.SEQ=TOP その こと=NOM 事実-COP-か 確信する-ADN.IRR
 swu=ka eps-e.
 すべ=NOM ない-DECL.NPST.NPOL
 「その上あなたの言葉だけ聞いたら（聞いても）そのことが事実なのか確信することができない」
 [BRE00287]

このように、条件を表す「副動詞 + 主題標識」と逆条件を表す「副動詞 + とりたて」は統語的な面でも、意味的な面でも関連がある。

5 なぜ「副動詞 + とりたて」が（逆）条件を表すのか

5.1 時間的關係と条件の關係

「副動詞 + とりたて」がなぜ（逆）条件を表すかという点、Kuroshima (2016) において「副動詞 + 主題標識」の分析で述べたように、副動詞が表す時間関係と条件の連続性によるものだと考えられる。つまり副動詞が表す継起的な意味が後続する事態に対して因果関係があると解釈されるとき、条件の意味が生じるのである。

Traugott (1985: 292) でも条件へと変化するソースとして最も一般的なのは時間関係を表す語彙であると述べ、様々な言語の例を挙げている。あるいは、Haiman (1986) は節の並置や等位節のみにより条件を表す例が、様々な言語に見られることを示している。Thompson *et al.* (2007: 257-8) はインドネシアやパプアニューギニアの言語で、予測的条件 (predictive conditionals) において未来時制になるとき 'if' と 'when' の区別がなくなる言語があるということを指摘している。この指摘は「副動詞 + とりたて」において主節に可能や疑問等のモダリティ要素を含むときに逆条件になると類似した現象と言える。

この仮説を支持する例として、副動詞 *-kose* は限られた用法ではあるが、副動詞のみで条件の意味を表すことができる (15)。ここでは扱っていないが、副動詞の *-taka* 「～している途中で」も単独で条件を表すことができる。

- (15) *ney miso=ka ani-kose nayka eti=ey ka-se ttasuha-m=ul nukki-l*
2:GEN ほほえみ=NOM NCOP-CVB.SEQ 1:NOM どこ=DAT 行く-CVB.SEQ 暖かい-NMLZ=ACC 感じる-ADN.IRR
swu iss-ulkka?
すべ ある-だろうか
「あなたのほほえみじゃなかったら、ぼくはどこに行って暖かみを感じられるだろうか？」²

日本語のテ形についても同様であり、古典日本語や現代語の方言にはテ形のみで条件を表す例があるし、「～ていいですか」におけるテ形も条件を表していると言える。

では、とりたての *=to* はどんな機能を果たしているのだろうか。この問題については次で考察する。

5.2 とりたての *=to* と逆条件の関係

野田 (1994: 36) では逆条件を表す「テモ」の「モ」は、「述語との結びつきが普通は考えられないような極端なものを表す」次の (16) のような「モ」に対応していると指摘する。朝鮮語の *=to* にも同じような用法があり、このような意味の *=to* が逆条件を表す *-ko=to* などの *=to* に対応していると考えられる (17)。Ham (2013: 129) は、*-ko=to* には直接言及していないが、その他の「統合形」接続語尾において譲歩の意味が生じるのは、*=to* の基本的な意味である「追加」により、特に「極端」な項目を追加するときだと述べている。

- (16) ことしの夏は、日帰りの旅行にも行かなかった。(野田 1994: 36)

- (17) *achim=pwuthe pap=to mos mek-ess-ta.*
朝=から ご飯=も IMPS 食べる-PST-DECL
「朝からご飯も食べられなかった」

5.3 逆条件とアスペクトの関係

ヤコブセン (2011) は日本語の条件表現に関して、未完了アスペクトの持つ時間的複数性によって仮定的意味が生じるということを論じている。さらに、日本語の「テモ」についてもこの分析を当てはめ、「洗っても洗っても汚れは落ちなかった」(ヤコブセン 2011: 15) のような例が表す時間的複数性により仮定的意味が生じると述べている。

朝鮮語の「副動詞 + 主題標識」の場合、継起的な副動詞よりも仮定条件の意味に用いられやすい *-taka=nun* は、副動詞 *-taka* が「～している途中で」という未完了の意味を表し、たしかにヤコブセン (2011) の主張通り未完了と仮定に関連があるようである。しかし「副動詞 + とりたて」の場合、*-taka* はとりたての *=to* が付いても逆条件の意味は表さない。朝鮮語の場合、逆条件はむしろ未完了よりも完了の意味と関連があるのではないかと考えられる。朝鮮語で条件と逆条件を表す副動詞のうち、最も一般的なのはそれぞれ

² 例文は Google ブックスより引用する。出典：I, Cengswuk (2014) “Nwukwueykeyna swuhochensaka isstan kel asinayo?” [誰にでも守護天使がいるということをご存知ですか?], Lomaynsutholi, https://books.google.co.jp/books?id=nGAQCgAAQBAJ&hl=ja&source=gbs_navlinks_s

-(u)myen と -(a/e)to であるが、前者は副動詞の -(u)mye 「～し、～しながら」と主題標識によって成ると分析され、後者は副動詞 -(a/e) 「～し、～して」と =to から成ったと考えられる。このような例を見ると、少なくとも朝鮮語においては未完了の副動詞と条件、完了の副動詞と逆条件には関連があるようである。

6 まとめ

本発表では「副動詞 + とりたて」が逆条件を表すときには主節が可能形や疑問形で現れること、またこれは、条件を表す「副動詞 + 主題標識」と並行的な統語的特徴を見せるということを明らかにした。このような特徴は「副動詞 + とりたて」と「副動詞 + 主題標識」を比較して初めて明らかになる。逆条件は英語の ‘even if’ のように、様々な言語において条件節に ‘also, even’ のような要素を付加して表すという形態的類似性を見せ (Haiman 1986; Haspelmath 1998), 朝鮮語もやはり軌を一にする。ただ朝鮮語の場合は「副動詞 + 主題標識」との関係を考慮にいれるとより興味深い例を提供すると考えられる。最後に副動詞が表す時間関係と条件の連続性により条件の解釈が生じ、極端なものとりたてて述べる =to の意味から逆条件を表すということを論じた。

略号一覧

ACC: 対格, ADN: 連体形, ADVLZ: 副詞化, CAUS: 使役, COM: 共格, CONC: 譲歩, COP: コピュラ, CVB: 副動詞, DAT: 与位格, GEN: 属格, DECL: 叙述, IMPS: 不可能, IRR: 非現実, N-: 非-, NEG: 否定, NCOP: 否定のコピュラ, NMLZ: 名詞化, NOM: 主格, PL: 複数, POL: 丁寧, PST: 過去, QUOT: 引用形, SEQ: 継起, TOP: 主題, 1: 1 人称, 2: 2 人称, -: 接辞境界, =: 接語境界, #: 語境界

参考文献

- Haiman, John (1986) “Constraints on the form and meaning of the protasis”, Elizabeth Closs Traugott, Alice ter Meulen, Judy Snitzer Reilly & Charles A. Ferguson (eds.) *On conditionals*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 215-227
- Ham, Byeong Ho (2013) ‘pocosa ‘to’ thonghaphyeng cepsokemiey tayhan yenkwu’ [補助詞 ‘to’ 統合形接続語尾についての研究], “hankwukemwunhakyenkwu” [韓国語文学研究] 60, tongakemwunhakhoy, pp. 107-148
- Haspelmath, Martin & König, Ekkehard (1998) “Concessive conditionals in the languages of Europe”, van der Auwera, Johan (ed.) *Adverbial constructions in the languages of Europe* (Empirical Approaches to Language Typology/EUROTYP, 20-3), Berlin: Mouton de Gruyter, pp. 563-640
- Jin, Chanhua (2008) ‘lyenkyelemini “-koto”uy uymiyangsang kwa thongsacekceyyak’ [連結語尾 “-koto” の意味様相と統辭的制約], “cwungkwukosenemwun” [中国朝鮮語文] 156, Killimsengmincoksamwuwiwenhoy, pp. 5-9
- Kuroshima, Norifumi (2016) “‘Converb + Topic Marker’ Conditionals in Korean” (Poster presentation), Proceedings of 24th Japanese/Korean Linguistics Conference, pp. 152-3
- Lee, Kee-dong (1977) ‘tayco/yangpouy cepsokemiuy uymiyenkwu (I)’ [対照・譲歩の接続語尾の意味研究 (I)], “語學研究” 13-2, sewultayhakkyo ehakyenkwuso, pp. 129-137
- 前田直子 (2009) 『日本語の複文——条件文と原因・理由文の記述的研究——』, 東京: くろしお出版
- 野田尚史 (1994) 「仮定条件のとりたて——「～ても」「～ては」「～だけで」などの体系——」, 『日本語学』 13-9, 東京: 明治書院, pp. 34-41
- Thompson, Sandra A., Robert E. Longacre and Shin Ja J. Hwang (2007) “Adverbial clauses”, Timothy Shopen (ed.) *Language Typology and Syntactic Description*, Volume 2: Complex Constructions [2nd edition], Cambridge: Cambridge University Press, pp. 237-300
- Traugott, Elizabeth Closs (1985) “Conditional markers”, John Haiman (ed.) *Iconicity in syntax*, Amsterdam: John Benjamins, pp. 289-307
- ヤコブセン, ウェスリー・M (2011) 「日本語における時間と現実性の相関関係——「仮定性」の意味的根源を探って——」 『国語研プロジェクトレビュー』 5, 国立国語研究所, pp. 1-19